

Ceci dit, cela ditについて

渡 邊 淳 也

1. はじめに¹

本稿は、フランス語で比較的良好に使われる連結辞 (connecteur) である ceci dit および cela dit の機能について考察することを主たる目的とする。ただし、他の用法との関連において考察することが有益であると考えられるため、典型的な連結辞用法だけでなく、ceci dit, cela dit という連辞の観察されるすべての用法を問題とすることにした。

通常は連結辞の前と後に位置していて、連結辞がつないでいると考えられる言説切片を、それぞれ、「前件」(antécédent)、「後件」(subséquent) とよぶことにする。一般的には、後件は前件にくらべて統辞的に連結辞と密接である。たとえば表記上も、典型的な場合には、前件のあとヴィルギュル、ポワン、ドゥポワンなど（話しことばでは休止）を介して連結辞がくるのに対して、連結辞と後件のあいだにはヴィルギュルなど（話しことばでは休止）はないか、または前件と連結辞のあいだよりは小さな区切りしかおかれぬ。そうしたことから、一般に、連結辞は後件とともにひとつのまとまりをなしているとみることできる。しかし、そのまとまりが、なにを前件としてうけたうえで述べられているかを明確にすることは困難である場合が少なくない。連結辞と前方照応 (anaphore) との深い関係²を論じた Berrendonner (1983) が指摘しているように、連結辞における前件の画定の困難は、前方照応辞 (anaphorique) における先行詞 (antécédent) の画定の困難とたいへん似かよっている。いま、日本語での照応論の慣行にしたがって「先行詞」という用語をもちいたが、フランス語では連結辞の「前件」とおなじく antécédent であり、本来別の概念ではない。本稿では、ceci dit, cela dit を包括的に扱うことを目的としているので、きわめて照応的な事例の記述に際しても、ひとしく「前件」の語を用いることにする。ただし、ceci dit, cela dit に限っていえば、前件は明確に画定可能であることがほとんどである。このことは、これらのマーカーの研究のためにおさえておくべき点のひとつである。

以下の論述は、つぎにしめすような手順によってなされる。まず2節で, *ceci dit*, *cela dit* の先行研究を検討する。ついで3節で, 本稿筆者の行なったコーパス調査の概要を提示するとともに, その結果について考察する。4節では *ceci dit*, 5節では *cela dit* について, 実例の観察に即して機能を記述してゆく。

2. 先行研究

Ceci dit, *cela dit* を直接の対象とした先行研究はきわめて少ない。以下では, *ceci dit* を対象とする Nyan (1992), *cela dit* を対象とする Rossari (2005) についてみておきたい³。

2.1. Nyan (1992)

Nyan (1992) は, *ceci dit* の連結的機能について, つぎのような仮説を提出している。

« Soit une suite « X *ceci dit* Y » (où X et Y sont des suites matérielles). En disant « *ceci dit* Y », à la suite de « X », le locuteur L fait un discours parenthétique adressé à un interlocuteur privilégié.

Ce discours, qui porte sur l'un des engagements de consistance de L en X, dit que si d'une manière générale cette position de L est maintenue, L adhère, cependant, simultanément à une position (exprimée en Y) qui va, dans une certaine mesure, à l'encontre de la première et doit lui être substituée en certaines circonstances. » *(ibidem, pp.181-182)*

「X *ceci dit* Y において, 話者 L は, X につづけて *ceci dit* Y というとき, 特権化された対話者⁴にむけて余談を導入している。

この余談は, X に対する L の『一貫性の保証』(engagements de consistance) のひとつを対象とするものであり, 一般的には L の立場は維持されるとしながらも, L は同時に当初の立場には反し, 一部の状況ではとって代わる, (Y であらわされる) もうひとつの立場にも賛同するというを示している。」

Nyan (1992) によると, たとえばつぎの例において,

- (1) Ils ne sont restés que deux jours à Vienne. [=X] **Ceci dit**, ils ont vu la maison de Wittgenstein. [=Y] (*ibidem*, p.182)
 かれらは2日しかウィーンにいなかった。とはいえ、ヴィトゲンシュタインの家は見てきた。

Xからは $r = \{ \text{ils n'ont eu le temps de rien faire} \}$ (かれらはなにををする時間もなかった) がみちびかれうるが、Yからは r の否定である $\sim r$ がみちびかれうる。言いかえると、つぎの(2)のようになる。

- (2) D'une manière générale, je suis prêt à dire qu'ils n'ont eu le temps de rien faire, du fait qu'ils ne sont restés que deux jours à Vienne ; cependant, je dirai également que, en un sens, ils ont fait quelque chose, dans la mesure où ils ont vu la maison de Wittgenstein. (*idem*)
 一般に、わたしは、かれらがウィーンに2日しかいなかったことから、なにををする時間もなかった ($= r$) と言ってもよい。しかし、かれらがヴィトゲンシュタインの家を見たのであるから、わたしはまた、ある意味ではかれらはなにかをした ($= \sim r$) とも言う。

Nyanの仮説でいう「一貫性の保証」とは、話者Lがある内容に対して一定の立場をとった場合、同じ概念的ネットワークに属する他の内容に対しても同じ立場をとる⁵、ということである。すなわち、論証的方向性をおなじくする内容(たとえば、(2)で、 r をみちびくという共通点をもついくつかの内容)のみをのべる、という意味での「一貫性」である。その点に対して留保をつけることが、ceci ditが導入する「余談」の機能であるということになる。

Nyan (1992)が強調しているもうひとつのポイントは、前件X、後件Yがそれぞれに別個の発話行為(énonciation)をなす、ということである。その証拠に、non seulement... mais... や、d'abord... ensuite... のように、連なったひとつの発話行為を形成する連結辞とceci ditは両立しない。

- (3) ***Non seulement** ils ne sont restés que deux jours à Vienne, **mais ceci dit**, ils ont vu la maison de Wittgenstein. (*ibidem*, p.185)
 かれらは2日しかウィーンにいなかっただけでなく、そのうえ、ヴィトゲンシュタインの家は見てきた。

- (4) ***D'abord** ils ne sont restés que deux jours à Vienne, **ensuite ceci dit**, ils ont vu la maison de Wittgenstein. (*idem*)
 まず, かれらは2日しかウィーンにいなかった。そして, そのうえで, ヴィトゲンシュタインの家は見てきた。

前件と後件を, ふたつの別個の発話行為として連結するという点は, 動詞 *dire* の過去分詞 *dit* が用いられていることから, 前件を言い終わった時点ですでにひとつの発言 (*dire*), すなわちひとつの発話行為が果たされたあとの結果状態がさし示されているという, 文字通りの意味からも演繹可能であると思われる。

最後に, Nyan (1992) の主張としてあげられることとして, *ceci dit* で結ばれた前件と後件によってあらわされる, ふたつの立場がともに維持される (*maintien des deux positions, ibidem, p.193*) ということがある。そのことは, たとえば, つぎの例における *aussi* との共起によって証明されるという。

- (5) Qu'est-ce qu'elle peut lui trouver ? Ça, on se demande bien ! **Ceci dit**, il faut dire **aussi** que les goûts et les couleurs, ça ne se discute pas. (*ibidem, p.194*)
 あの子は彼の何がいいんだろう? それはだれもが不思議に思うところだ! とはいえ, 「蓼食う虫も好き好き」ともいうべきだけれど。

要するに, 前件と後件はみちびきうる結論において対立しうが, 前件と後件の内容自体は両立するものである。この点を事例によって示した Nyan (1992) の議論は説得的であり, 本稿もその方向性に基本的には賛同している。

ただし, あえて問題点を指摘するなら, 言語内論証理論 (*Théorie de l'argumentation dans la langue*) に依拠した論考であり, *ceci dit* の諸用法のなかでも, 論証的な連結をあらわす用法のみを扱っているために, *ceci dit* という形式に関する意味論が欠如しており, せまい意味での連結辞としての用法も, 他の用法との関連のなかで議論すればいっそう理解が深まるのではなからうか。

2.2. Rossari (2005)

Cela dit に関する先行研究, Rossari (2005) による仮説は, つぎのようなものである。

« Dans une suite X, *cela dit* Y, où le contexte X correspond à la partie de texte concernée par l'enchaînement marqué par *cela dit*,

- (i) *cela dit* utilise comme antécédent le contenu que le locuteur croit avoir communiqué ou a communiqué via le contenu de l'acte énoncé dans le contexte gauche ;
- (ii) *cela dit* signale que ce contenu doit être supprimé ;
- (iii) l'énoncé introduit par *cela dit* évoque une réserve par rapport à ce contenu. » (*ibidem*, p.95)

[X, *cela dit* Y という連鎖 (ただし, X は *cela dit* による連結にかかわるテキストの部分とする) において,

- (i) *cela dit* は左文脈の発話 [=X] の内容を通じて発話者が伝達したと信ずる, あるいは伝達した内容を前件とする.
- (ii) *cela dit* はその内容が「除去」⁶ されるべきものであることを標示する.
- (iii) *cela dit* によって導入された発話文 [=Y] は, その内容に対する留保を喚起するものである.]

この仮説のうち, (i) の部分は, *cela dit* の機能する対象として, X から推論可能なことや, X の発話行為の適切性条件 (condition de félicité) もふくまれることを示しているという.

- (6) Il fait très beau aujourd'hui ; **cela dit** malheureusement j'ai du travail.
(*ibidem*, p.95)

きょうはとても天気がいい. とはいえ, 残念ながらわたしには仕事がある.

- (7) Essaie de finir l'article demain ! **Cela dit**, ce n'est pas très important.
(*ibidem*, p.94)

明日までに論文を書きおわるよう努めなさい. もっとも, たいして重要なことではないが.

(6) では, X の「とても天気がいい」ことから推論可能な帰結として, たとえば「外出する」ということがあげられる. しかし, Y 「残念ながらわたしは仕事がある」ということで, 「外出する」ことが否定される. (7) では, 命令法によってのべられた X の背景に, 命令という発話行為の適切性条件として, 「命令したことを, なすべき重要なこととしてとらえている」ということ

が想定される。Yの「たいして重要なことではない」という内容は、その想定を否定しているのである。

そして、(ii), (iii)の部分は、Rossariによると、つぎのような例によって示されるという。

(8) Avez-vous eu des résultats ? **Cela dit** je préférerais ne pas les connaître. (ibidem, p.93)

もう結果はわかりましたか？ もっとも、わたしは知らない方がいいけれど。

(9) ?? Quel temps fait-il à Aix ? **Cela dit** je ne veux pas obtenir de réponse. (ibidem, p.97)

エクスではどんな天気ですか？ とはいえ、答えを得たいとは思っていません。

しかし、これらの例は Rossari 自身の仮説に沿っていないように思われる。Cela dit がみちびくのは、(iii) でいう「留保」であることはたしかであるが、その留保がどれほどの強さかということを考えると、(ii) でいうように前件が「除去される」というのはいささか強すぎるように思われる。むしろ、(8), (9) の対比でいうと、前件と後件は、字義のレベルでは両立可能な範囲でしか対立してはいけないようである。(8) では、前件から推論される「知っておいた方がよい」という内容が否定されているにすぎないが、(9) では、疑問文に内在する発語内行為までもが否定されているので不自然な連鎖になる。

したがって、本稿が対置する仮説は、「連結的用法において、cela dit がみちびく後件は留保をあらわすが、前件と字義のレベルで対立しない範囲での留保しかつけられない」ということになるであろう。

実際、つぎの例のように、後件が il n'en est pas moins vrai que... ではじまる例はめずらしくない。

(11) Ainsi les groupes d'intérêts doivent rivaliser les uns [=partis] avec les autres pour s'assurer une certaine influence au sein des partis ; ils peuvent même chercher à gagner la faveur des républicains et les démocrates tout à la fois, mais cela impose une certaine retenue à bien des groupes. **Cela dit, il n'en est pas moins vrai** que les groupes d'intérêts représentent une force puissante dans la vie politique américaine. (M. J. Skidmore, *La Démocratie américaine*, pp.107-108)

たとえば、利益団体はある政党を他の政党と競わせ、それらの政党内で一定の影響力を保とうとする。それらの団体は、共和党と民主党の両方から同時に便宜を得ようと考えますが、そのようなことは多くの団体にとって、よほど目立たないようにしなければならない。(しかし) そのうえで、利益団体がアメリカの政治活動において強い力を代表していることもまた同様に真である。

この例では、前件が「除去されている」というのからはほど遠く、il n'en est pas moins vraiが、意味的な同等比較級(文字通りには劣等比較級の否定)であることから、「後件も前件と同じくらいに真実である」といっているのであり、前件はまさしく保持しておいたうえで、後件としてのべる留保をつけ加えているのである。Ceci dit に関して Nyan (1992) が言っていたことと同様に、cela dit に関しても、前件と後件によってあらわされる、ふたつの立場が維持されるのである。

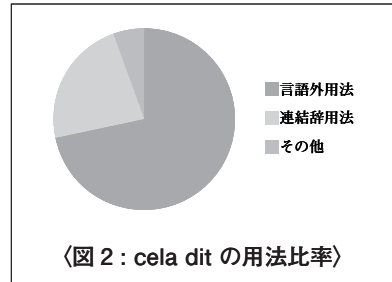
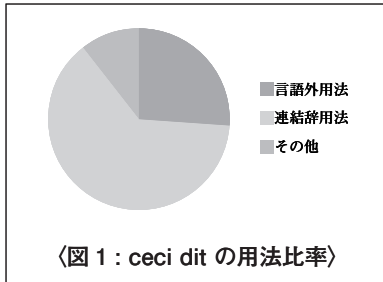
3. コーパス調査

本稿では、ceci dit, cela ditの使用実態を知るため、コーパス調査を実施した。ここではその調査結果の概要と、若干の考察を提示したい。

フランス語の書きことば(ただし、直接話法のせりふや、戯曲のせりふという形では、話しことば的な要素も混在している)の総合的コーパス、「Corpatext 1.02」⁷を用いて、ceci dit, cela ditの全生起を検索した。ceci ditは19例、cela ditは127例の生起が発見された。ただし、これだけでは適切な文例が不足する場合は、随所で必要に応じて他の出典からの例もあわせて引用することとした。

調査した範囲では、ceci ditとcela ditに用法のかたよりのある。ここで、「前件を言いおえたあとで、後件であらわされる言語外の行為をする」という、相対的に字義に近い意味(これを言語外用法とよぶ)から、「前件を言ったうえで、後件を言う」という発話行為間の連結辞としての機能にいたる語用論化(pragmaticalisation)⁸を想定し、その過程の進みかたを比較することができる。

Ceci ditは明確に連結辞と化している例が多い。連結的用法では、「前件を言った(そして、その結果として果たされる言語行為を果たした)あとではじめて有効になるような発話文が後件にくる」ことになり、かつ後件を傍論として扱うことを示すにいたっている(19例中12例、63.2%)。「言い終えて彼は



立ち去った」というように、後件に言語外の行動がくる例は少ない（19例中5例，26.3%）。

これに対して，cela dit は，調査した範囲では明確に連結辞と化している例が少なく（127例中29例，22.8%），後件に言語外の行動がくる例が大多数（127例中91例，71.7%）であった。ここでのデータだけからいうと，cela dit のほうが相対的に語用論化が遅れている。ただしもちろん，めずらしい用法というわけでもない。今回の結果は使用したコーパスの（書きことば寄りの）性質にも依存しているかもしれないので，他のコーパスでも調査することを今後の課題としたい。

ここで，ceci dit を連結辞的（すなわち，言語内照応的）に用いることを禁じようとする規範的な立場もあることをみておこう。連結辞は，1節でのべたように前方照応との関連が深い，ceci は，voiciと同様に，言語内照応の際は後続文脈をさすのが原則であるので，それを無理に前方照応的に用いてしまうことになるceci dit は誤用であるというわけである。それに対し，celaの方は，voilàと同様，先行文脈をさせるので，cela dit が推奨されることになる。それにもかかわらず ceci dit が用いられるようになったのは，Thérive (1929-1940, 3^{ème} série, p.95) によると，「先立つ段落を，済んだものとしてではなく，なおたいへん近いものとしてとらえるから」⁹であるという。たしかに，直示的ないし言語外指示的用法では，-ci は近いものをさし，-là は遠いものをさすものであるから，ceci dit はあたかも直示のように用いられていることになろう。

ところが，上記でみたように，連結辞としての用法が占める割合は，ceci dit の場合の方が cela dit の場合より格段に大きいので，規範的な禁止はうまくいっておらず，むしろ規範がのぞむ方向とは反対の状況になっていることがわかる。本稿でも当然ながら，規範とはかかわりなく，あくまでも実態に即し

て ceci dit の連結辞としての用法を記述的に扱うこととしたい。ただし、用法分類を問わずに総生起数をくらべるならば、ceci dit は cela dit よりはるかに少ない。規範による抑圧は、総生起数の少なさという形であらわれているのかもしれない。

ここで、両者の用法上の差異がなぜ出てきているのかを考えてみたい。この差異には、ceci / cela を弁別するものとして、ceci では直示記号素 c- があるのに対して、cela では照応記号素 l- があることが作用しているものと思われる。Kleiber (1995) による ici / là の分析は、ici を不透明な指標表現 (symbole indexical opaque), là を照応副詞 (adverbe anaphorique) として、機能の次元が異なるとしており、本稿の考え方と同じ方向性にある。ここでは、照応記号素をふくんでいるにもかかわらず cela のほうが ceci にくらべて後件で言語外に出やすいことは一見矛盾しているように思うかもしれないが、直示記号素をふくむ ceci が話しことばの場合は発話状況を、あるいは書きことばにおいては物理的な文面を、いずれも「直示」していると考えれば、連結辞への意味変化が進展していることも理解できるのではなかろうか。上記で言及した Thérive の説も、書きことばに関しては本稿の考え方と同様である。

コーパス調査の結果の報告にもどろう。以下では、語用論化の方向性を通時的にうらづけるために、例文のふくまれる原典の出版年代別にも分類し、用法分類との関係を確認した結果を提示する。

Ceci dit に関しては、本稿での調査の範囲では総数が 19 例と少ないので、統計的な価値は落ちるものの、以下〈表 1〉のように、時代をくだるほど連結辞用法の比率が高くなってきており、言語外用法から連結辞用法へという語用論化の方向性には一致している。

〈表 1：Ceci dit の用法と年代の関係〉（百分率は縦方向の比）

	19世紀後半	20世紀前半	20世紀後半
言語外用法	4 (66.7%)	2 (40.0%)	0
連結辞用法	2 (33.3%)	2 (40.0%)	6 (75.0%)
その他	0	1 (20.0%)	2 (25.0%)

一方、cela dit については、総数 127 例あり、つぎの〈表 2〉のような結果になった。これをみる限りでは連結辞的用法は 19 世紀前半から確認され、やはり、時代をくだるにつれて割合が増してきている。ここでもまた、連結辞用

法を言語外用法からの拡張としてとらえることが、通時的にもうらづけられこととなる。

〈表 2：Cela dit の用法と年代の関係〉（百分率は縦方向の比）

	17世紀後半	18世紀前半	18世紀後半	19世紀前半	19世紀後半	20世紀前半	20世紀後半
言語外用法	2(100%)	4(100%)	18(100%)	23(92.0%)	30(83.3%)	1(20.0%)	13(35.1%)
連結辞用法	0	0	0	2(8.0%)	5(13.9%)	2(40.0%)	20(54.0%)
その他	0	0	0	0	1(2.8%)	2(40.0%)	4(10.8%)

さらに、ceci dit と cela dit を通時的な観点から比較していえることは、ceci dit という形式自体の出現が cela dit より遅いということである。本稿のコーパス調査の範囲内では、cela dit の用例は17世紀後半（いずれも La Fontaine）からあるものの、ceci dit の用例は19世紀後半からしかない。さきに言及した Thérive (1929-1940) も、ceci dit を、徐々に cela dit を駆逐しつつある新興の、しかし誤った形式として否定的にとりあげている。規範的に好ましくないと言われるのは、たいてい新興の形式であるという一般的な傾向が、ここでも再現されているといえる。

4. Ceci dit

以下、言語外的用法から連結辞用法へという順で、例文をみながら ceci dit の意味と用法について考察してゆきたい。

まず、前件に直接話法のせりふがきて、後件に（その発言をした話者による）言語外の行動が来るタイプがある。このタイプは、「これを言いおえて」という ceci dit の字義にもっとも近い。すなわち、前件を言いおえた結果状態をさす文字どおりの意味から、その結果状態と同時性の関係にある事態を後件として示すことはごく自然である。

- (12) — Bien, monsieur le professeur, répondit le capitaine Nemo, nous vous montrerons mieux que cela, je l'espère. Quant à la profondeur moyenne de cette partie du Pacifique, je vous apprendrai qu'elle est seulement de quatre mille mètres. **Ceci dit**, le capitaine Nemo se dirigea vers le panneau et disparut par l'échelle. (Jules Verne, *Vingt mille lieues sous les mers*, CT)

「さて、先生」とネモ船長はこたえた。「うまくお示しできるとよいのですが、太平洋のこのあたりの平均水深は4000メートルです」これを言って、ネモ船長は表示板のほうにむかい、はしごを使って消えていった。

こうした例では、前件は言語内、後件は言語外というように位相が異なるため、両者の内容どうしには元来関係がないといえる。

つぎに、前件が発言の内容を示してはいるものの、直接語法ではない例。これも言語外用法であることには変わりがないが、全体を発話者のことばとして解することができるため、前件と後件のあいだの位相の落差は(12)のような例より狭まっているといえる。

- (13) Tout d'un coup, il proteste contre un monsieur bleu. Il lui reproche notamment, d'une voix verte, de le bousculer chaque fois qu'il descend des gens. **Ceci dit**, il se précipite, vers une place jaune, pour s'y asseoir.

(Raymond Queneau, *Exercices de Style*, CT)

突如、かれは青い男のひとに抗議する。緑の声で、とりわけ、ひとが降りるたびにぶつかってきたと責める。これを言って、かれは黄色い席にすわるために突進する。「虹」をテーマにした文体練習なので、無意味に色が出てくる

つぎに、前件を言ったうえで補足的に後件をいう、語用論化のすすんだ例。典型的な連結辞として分析されるのは、このような用法である。

- (14) Au point où vous en êtes de votre enquête, il ne s'agit pas bien entendu d'éviter la lumière, mais il faut savoir comment on doit s'y prendre pour arriver à la manifestation de la vérité. **Ceci dit**, il faut éviter toute fausse manoeuvre, et surtout se garder de démarches irréparables.

(Jean Jaurès, *Les preuves*, CT)

あなたの調査の現段階において、いうまでもなく、事実解明を避けようとするのではなく、真実が明白になることを目指していかにとり組むか、ということを知らなければならない。そのうえで、いつわりの操作を避け、とりわけ、修復不能な手順をとらないようにしなければならない。

- (14) においては、ceci dit がみちびいている後件は、前件に対するただし

書きのような内容である。「真実が明白になることを目指して」という前件からは、ともすると、性急に結論を出すという調査姿勢がみちびき出されかねない。そうした誤った推論を防ぎとめるために、後件がのべられているのである。後件は留保になっているが、前件に直接対立するものではなく、潜在的な帰結のひとつに対立するものである。

それでは、ceci dit という形式がなぜこのような意味をもつようになったのであろうか。まず、前件を言いおえたあとの結果状態が問題になることは言語外用法と同様である。言語外用法とちがうところは、言いおえたあとの結果状態に位置づけられる事態もまた、前件とおなじ発話者による発話行為であるということである。すなわち、「ceci dit (après que ceci a été dit / j'ai dit ceci), je **dis** que...」(「前件を言っておいたうえで、後件を言う」)というように、後件をみちびく発話動詞をおぎなって言いかえることができる。

連結辞用法において、後件がただし書き、ないし留保にあたるということは、どのようにして出てくるのであろうか。「前件を言っておいてから後件を言う」という順序と、わざわざ前件についてのみ明示的に「それを言っておいて」と発言動詞をもちいて念押しをしているということから、前件のほうが主たる内容であり、後件は傍論にすぎない、という意味効果が出てくるものと考えられる。

さらに、潜在的帰結において対立しながらも両立するという前件と後件の関係はどこから出てくるかという点、同じ発話者による発言であることから、根柢からくつがえるような対立はないものの、前件から結果的に推論されうる含意に対しては、それを無効にする操作はありうる、ということである¹⁰。

例文の観察の最後に、特異な例として、後件がない例をあげることができる。ここでの意味は、Ceci est dit「それは言われた」に近い。ただし、副詞的修飾がともなう例もある(後件がない3例中2例)。

- (15) À la fin de la première guerre mondiale, lorsque se posa le choix du siège de la Société des Nations, le souvenir de l'arbitrage de l'Alabama fut évoqué par les édiles locaux, avec la présence de la Croix-Rouge, comme le principal argument d'ordre sentimental justifiant la candidature de Genève ; **ceci dit** sans minimiser aucunement les atouts objectifs que possédait le canton à ce titre.

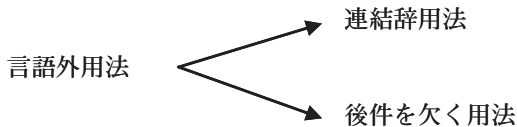
(Ladislas Mysyrowicz, *L'affaire de L'Alabama*, CT)

第一次大戦のあと、国際連盟の本部所在地を選択しようというときに、地元の担当者から「アラバマ裁定」の記憶が、赤十字の存在とともに喚起され、それがジュネーブを本部所在地の候補とすることを正当化する主な感情的論拠とされた。そのことは言われたが、この件でジュネーブがもつ客観的な切り札をなんら軽視するわけではなかった。

このような例は、ceci dit の字義に近い言語外用法から連結辞用法にいたる意味変化とは異なる用法拡張をこうむった事例であると考えられる。なぜなら、ceci dit に後続するのが、連結辞論における「後件」に相当するものではなく、単に dire の様態であり、それをえがき出すことはあくまでも言語外的な視点からなされるからである¹¹。

Ceci dit の各用法の派生関係をまとめると、つぎのようになる。

(16) Ceci dit の各用法の派生関係



本節での観察から、ceci dit の機能の記述をまとめておくと、つぎのようになる。Ceci dit は、「そのことを言いおえた」という字義から、言いおえた結果状態と同時性の関係にある言語外の行動の描写を後件としてみちびきうる。そこから語用論化が起き、派生した用法として、連結辞用法がある。連結辞用法は、前件からの潜在的帰結と対立する留保として後件の発話行為をみちびく。その結果、前件と後件は直接には矛盾しない。一方、後件を欠く用法は、言語外用法から連結辞用法にいたる意味変化とは異なる用法拡張をこうむった事例であり、前件の発話行為の様態を示す。

5. Cela dit

つぎに、cela dit について文例に即して検討しよう。前節と同様の手順で進めてゆくと、ceci dit と共通する論点も多いので、前節で行なった議論も利用することとする。

3節でのべたように、cela dit に関しては、直接話法のせりふのあと、(その発言をした話者による)言語外の行動をみちびく形がもっとも多い。

- (17) « Adieu donc, mes amis, et que le Ciel vous assiste ! » **Cela dit**, James Starr pressa dans ses bras le plus vieil ouvrier de la houillère, dont les yeux s'étaient mouillés de larmes. (Jules Verne, *Les Indes noires*, CT)
 「さようなら、みなさん。あなたがたに天の加護がありますように！」 言い終えて、ジェームズ・スターは炭鉱のいちばん年よりの鉱夫を抱きしめた。鉱夫の目は涙でぬれていた。

この種の例は、「それを言ったあとで」という、*cela dit* の文字どおりの意味から直接に理解できる。過去分詞 *dit* であらわされる結果状態と同時性の関係にある言語外の行為が後件でのべられているからである。前件と後件のあいだには、言語内・言語外という位相のずれがある。

ここから一段進んだ例として、後件に言語外の行動がくるが、前件が直接話法ではなく、発話関連動詞 (promettre 「約束する」, assurer 「保証する」 *etc.*) でまとめられている例があげられる。

- (18) Jésus-Christ leur promet d'être avec eux jusqu'à la consommation des siècles, et assure par cette parole la perpétuelle durée du ministère ecclésiastique. **Cela dit**, il monte aux cieux en leur présence.

(François René de Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem et de Jérusalem à Paris*, CT)

イエス・キリストは、何世紀も経つまでかれらとともにあると約束する。そして、そのことにより、聖職が永遠につづくことを保証する。そう言って、キリストはかれらの見ている前で天にのぼっていった。

つぎの例は、コーパス分析の際には言語外用法に分類したものの、言語内・言語外の境界的な例であるといえる。後件 (*j'aurais tout dit*) もまた、発話行為を問題としていることから、ある意味で現実世界における行動であるともいえる。

- (19) Quand vous écrivez pour les enfants, ne vous faites point une manière particulière. Que tout vive, que tout soit grand, large, puissant dans votre récit. C'est là l'unique secret pour plaire à vos lecteurs.

Cela dit, j'aurais tout dit, si, depuis vingt ans, nous n'avions en

France et, je crois bien, dans le monde entier, l'idée qu'il ne faut donner aux enfants que des livres de science, de peur de leur gâter l'esprit par de la poésie. (Anatole France, *Le livre de mon ami*, CT)

こどもたちにむけて書くときは、特別な技巧をほどこしてはいけません。あなたの物語のなかで、すべてが生きるように、そしてすべてが大きく、広く、ちからづよくなるように。それこそが、あなたの読者に気に入られるためのただひとつの秘訣です。

それを言ったなら、わたしはもうすべてを言いつくしてしまうことになるでしょう。もし、ここ 20 年、フランスでは、そして、わたしが思うには世界中で、こどもには、詩で精神をだめにしないように、科学の書物しかあたえてはいけないという考えがあるとすれば。

以上のような推移的な例を経て、語用論化が進み、連結辞と化した典型的な事例として、つぎのような例があげられる。

- (20) Nous sommes alors embarrassés car la commémoration du tricentenaire du Code Noir ne saurait être tenue pour une forme d'expression artistique. **Cela dit**, elle pouvait constituer aux yeux de la population, qu'elle fût administrée par une municipalité de gauche ou de droite, un acte culturel pour le moins inhabituel ou, encore, bousculant l'ordre établi. (Marc Lastrucci, *L'évocation publique à Nantes de la traite négrière et de l'esclavage de « Nantes 85 » aux « Anneaux de la Mémoire »*, CT)

そのとき、わたしたちは、コード・ノワール（黒人奴隷に関するルイ 14 世の勅令）の 300 周年記念事業を、ある形式の芸術的な表現として行なうことができないことに困惑する。そのうえで、記念事業が、たとえ左派の市政のもとであれ右派の市政のもとであれ、市民から見れば、もっとも見なれない、あるいは、もっといえば、うち立てられた秩序をゆるがす文化的行為でもありえたのだ。

この例においては、前件で、「さまざまな制約によって、記念事業が芸術的な表現として行なわれない」ことをのべていることから、「記念事業がまったく見るにあたいしないものになることが不可避である」かのような潜在的帰結がみちびかれうる。後件はその潜在的帰結に対して作用し、「現状の制約のもとでも、より興味深い文化的な催事でもありえた」ことをのべている。後件は

前件に対するただし書き，ないし留保となっているが，前件の内容と後件の内容は直接対立するものではなく，たがいに両立可能である。

Cela dit の「それを言っておいたあとで」という字義から出発して，連結的な意味にいたる派生は，ceci dit の場合と同様であると考えられる。すなわち，« cela dit (après que j'ai dit ceci), je **dis** que... »（「前件を言っておいたうえで，後件を言う」）というように，後件をみちびく発話動詞が想定できるような用法が連結辞用法である。そして，「前件を言っておいてから後件を言う」という順序と，わざわざ前件についてのみ明示的に「それを言っておいて」と発言動詞をもちいて念押しをしているということから，後件は留保であることになる。また，前件と後件は同じ発話者による発言であることから，根柢からくつがえるような対立はないものの，前件から結果的に推論されうる含意に対しては阻却が可能であるということから，前件の内容と後件の内容は直接対立するものではなく，両立可能であることになる。

つぎに，後件がない例をみておこう。つぎの例は，ceci dit の場合とおなじく，cela est dit「そのことは言われた」と解釈可能であるが，dit「言われた」がfait「なされた」と等位におかれており，全体として言語外的であることがわかる。したがってここでも，ceci dit の後件がない場合と同様，言語外用法から連結辞用法に変化した派生とは異なる派生をとげた用法であるといえる。

- (21) Il exposa avec clarté la signification de la grève, montra les développements qu'elle pouvait prendre dans une situation générale objectivement révolutionnaire, et il prévoyait les mesures de répression que le gouvernement ne manquerait pas de prendre ; pour assurer la continuation de l'action ouvrière, il formait sans plus attendre des équipes de remplaçants au Comité de grève. Tout **cela dit et fait** très simplement, sans rien de l'emphase assez fréquente chez les habitants de cette région.

(Alfred Rosmer, *Moscou sous Lénine*, CT)

かれはストライキの意義を明確に説明し，それが客観的に革命的な一般状況のなかでとりうる発展を示し，政府がまちがいなくとるであろう弾圧手段を予見していた。労働者の行動の継続を保証するため，ただちにストライキ委員会の補欠要員を構成した。これらのことがすべて，たいへん単純に，この地方のひとびとによく見られる強調をまったくともなわないで言われ，なされた。

「後件」はないものの、(21)では、*cela dit*のあとに*dire*の様態がのべられていることも、連結辞用法との違いとして注目にあたいる。

ところで、*ceci dit, cela dit*は、話者交代の直後に出ることは不可能ではないが、自力では実例を発見できていない¹²。*Cela dit*が話者交代の直後に出る例として、Suomela-Salmi et Dervin (2009, p.252)につぎのような実例があった。ラジオ局France Cultureの討論番組 *Questions d'éthique*でおこなわれた、司会Monique Canto-SperberとゲストSylvie Mesureの対話からとられた例である。

(22) Sylvie Mesure : Y a beaucoup beaucoup d'auteurs qui ont travaillé qui ont travaillé euh sur ce point euh... c'est un des objectifs des sciences humaines d'expliquer euh... juste la genèse des normes etc. [...] comme je dis encore dans chaque cas il faut évaluer la genèse, expliquer la genèse des normes /

Monique Canto-Sperber : C'est une genèse collective /

S. M. : **Cela dit**, y a plein de travaux /

M. C. S. : Ce sont des hommes ensemble /

S. M. : Y a plein de travaux en... actuellement qui essaient de donner une consistance à l'idée de rationalité axiologique

シルヴィー・ムジュール：多くの、多くの研究者がその点について仕事を、仕事をしています、えー、人文科学の目的のひとつは、えー、規範の生成などを説明することです。くりかえしますが、それぞれの場合において、生成を評価し、規範の生成を説明しないといけないのです。

モニク・カント・スペルベル：それは集団的な生成ですよ。

S. M. : そのうえで、多くの研究があります。

M. C. S. : ひとつひとつが共同して...

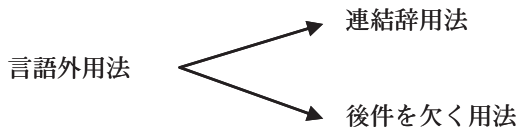
S. M. : 多くの研究があって、いま、価値論的な合理性という観念に整合性を与えようとしているのです。

このくだりでは、S. M. は、規範の生成には多くの、しかし個々の研究がかかわってきたと言いたいのにに対して、M. C. S. は、「だれによって」とは言えないかたちで、集団的、共同体的になされてきたと言いたいので、この部分で局所的に対立している（ただし、双方が同時になり立つ可能性も十分あるので、

本稿の仮説には抵触しない)。S. M. は, *cela dit*ということによって, 対話者の発言を一応は受け入れるふりをして, 実是对立する自説を補足のようなかたちでもちだしている。結果的解釈からすれば, 「反論的」事例であるが, 単に相手のことばを継いでいるという外見を残しながら, 一見矛盾しない解釈も可能なうえで反論をすべり込ませるといふ二重性を秘めた, トリッキーな連結であるといえる。

以上で行なってきた *cela dit* の用例記述をまとめてみよう。まず, 用法間の派生関係は, *ceci dit* の場合と同様, つぎの (23) のようにとらえられる。

(23) *Cela dit* の各用法の派生関係



Cela dit の各用法について言うことも, *ceci dit* の場合と同様である。すなわち, *cela dit* は, 「そのことを言いおえた」という字義から, 言いおえた結果状態と同時性の関係にある言語外の行動の描写を後件としてみちびきうる。そこから語用論化が起き, 派生した用法として, 連結辞用法がある。連結辞用法は, 前件からの潜在的帰結と対立する留保として後件の発話行為をみちびく。その結果, 前件と後件は直接には矛盾しない。一方, 後件を欠く用法は, 言語外用法から連結辞用法にいたる意味変化とは異なる用法拡張をこうむった事例であり, 前件の発話行為の様態を示す。

語用論化の過程そのものは, *ceci dit* と *cela dit* でたいへん似ているといえるが, それらの違いは, 3節でみた用法間のかたよりの違い, そして, *ceci dit*, *cela dit* の全体としての使用頻度の違いにもとめられる。用法間のかたよりについていうと, *ceci dit* のほうが *cela dit* より連結辞としての使用の割合が高い。その理由は, 直示記号素 *-c-* をふくむことから, 発話状況をさし示しやすく, 語用論化が促進されたからであると考えられる。しかし, 全体としての使用頻度は, *cela dit* のほうがはるかに多い。この違いは, *ceci dit* に対する規範的な禁止が, ある程度効果をあらわしていた結果としてとらえることができよう。

6. おわりに

以上、本稿では、ceci dit, cela dit をとりあげ、それらの連結辞としての機能がどのようなものであり、また、言語外的な用法からどのようにして連結辞用法が発生してきたかを考察してきた。その結果、判明したことをまとめておくと、つぎのようになる。

- ・本稿で実施したコーパス調査によると、ceci dit の全体としての使用頻度は cela dit よりはるかに低い（19 例対 127 例）ものの、連結辞用法が占める割合は ceci dit の方が cela dit の場合よりはるかに多い（63.2%対 22.8%）。前者の違いには、ceci に特徴的な直示記号素 c- が発話状況を直示することが作用している。後者の違いには、ceci dit に対する規範的な禁止が作用している。
- ・後件で言語外的な行為がのべられる用法は、ceci dit, cela dit の字義に近く、通時的にも古くからある用法である。連結辞用法は、そこから、後件にも発話行為を介することにより派生した用法である。
- ・連結辞用法において、後件は前件から生じうる潜在的な帰結のひとつに対立することにより、前件に対して留保をつける。前件と後件は直接対立しない。この留保の意味は、ceci dit, cela dit の文字どおりの意味から演繹可能である。
- ・後件を欠く用法は、言語外用法から連結辞用法にいたる意味変化とは異なる用法拡張をこうむった事例であり、前件の発話行為の様態を示す。

今後の課題として、とくに現在手薄な話しことばを中心として用例を増やして観察の範囲をひろげ、本稿でたてた仮説をさらに検証してゆくことと、他の連結辞との比較を行なうことがあげられる。これらについては、機会をあらためてとり組みたいと考えている。

註

- 1 本稿は2013年度～2014年度科学研究費助成基金 基盤研究(C) 課題番号25370422「フランス語および日本語におけるモダリティの発展的研究」(研究代表者: 渡邊淳也), ならびに2012年度～2014年度科学研究費助成基金 基盤研究(C) 課題番号24520530「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」(研究代表者: 和田尚明) の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である。
- 2 このことは, *ceci dit, cela dit* においては, *ceci, cela* という指示代名詞がふくまれていることによって, いっそう明確であろう。ただし, より詳細には, *ceci* と *cela* で少し性質が異なることを3節でのべる。
- 3 ほかに, *ceci dit* を *maintenant* の非時間的用法と対比した De Mulder (2006) があるが, *maintenant* をどう理解するかということも, それだけで別の大きな問題になるので, 本稿では立ち入らない。
- 4 「特権化された対話者」とは, Nyan (1992) のなかでは定義されていないが, 概略的には, *ceci dit* 以降にのべられるような詳細を知らせてもらえるという点で, 相対的に多くの情報をあたえられる対話者, ということであろう。
- 5 « [...] toute prise de position vis-à-vis d'un contenu implique une prise de position vis-à-vis des autres contenus relevant du même « réseau conceptuel ». » (Nyan 1992, p.205, n.1)
- 6 ここでいう「除去」とは, Rossari の定義する意味で用いられている術語である。Rossari (2002, p.289) はさまざまな連結辞が前件 (の与える情報) に対しておよぼす操作を, つぎの2種類にわけている。ひとつは除去 (*suppression*), すなわち, ある命題 *p* の有効化を阻却する操作である。その阻却ののちには, 談話記憶のなかで, *p* の真偽はわからない状態となる。もうひとつは, 代替 (*substitution*), すなわち, まず除去をおこない, そのあとに反対の命題をあらたに有効化することである。Rossari は, 言いなおし (*reformulation*) の連結辞を主たる研究対象にしているせいか, 連結辞が前件 (の与える情報) に対してなにがしかの「破壊力」をもつ事例にしか興味がないようであるが, 実際には, 前件 (の与える情報) は保持しておいて, 後件 (の与える情報) を談話記憶に累加するようなタイプの連結辞も存在する。本稿では, *ceci dit* はまさにそのタイプであると考えている。
- 7 « *Corpatext 1.02* » は, パリ第5大学などの研究グループ « *Lexique* » によって, 18世紀から20世紀までの文学作品やジャーナリスティックな文を中心とする, 約2700件の原典から集積することで編纂された, 約3700万語からなるコーパスであり, インターネット上に無償で公開されている。 <http://www.lexique.org/public/lisezmoi.corpatext.htm> からダウンロードでき, 手もとで自由に使用できる。なお, これ以降, « *Corpatext 1.02* » から引用した例は, 出典表示の末尾に略号 CT を付する。
- 8 広義の文法化 (*grammaticalisation*) といわれることもあるが, この用語はあまりにも多義的になってしまったため, ここでは使わない。一方, 語用論化 (*pragmaticalisation*) は, 語彙的な要素が談話マーカースとして用いられるようになることをさしており, *ceci dit, cela dit* の事例に適した用語であると思われる。なお, これらの用語については Dostie (2005) を参照。

- 9 « Notons que *ceci dit* a presque évincé *cela dit*. C'est que le paragraphe précédent est considéré non pas comme fini, mais comme encore tout proche » (Thérive 1929-1940, 3^{ème} série, p.95)
- 10 この点は、田代 (2012) (2013) (近刊) で論じられている *au contraire* の事例と対照的である。Au contraire は、前件と後件との真っ向からの対立をあらわすため、モノローグ的用法 (前件、後件をひとりの発話者がつづけてのべる用法) で、前件と後件の主題が同一の場合は、前件を否定文、またはなんらかの否認 (dénégation) をのべる発話文にして、その前件のなかにふくまれる肯定的命題と後件との対立を示すようにしなければならないという制約がある。そのようにしなければ、発話の一貫性がそこなわれるのである。一方、樋口 (2012) が論じている *quand même* にはそのような制約はなく、*ceci dit* などと同様である。この差は、連結辞があらわす対立の強さの差として考えることができる。
- 11 発話文 (énoncé) とちがって、発話行為 (énonciation) は、発話文を現実世界において発することであるから、その他の行為とおなじく、言語外的であるといえる。このことについては、Berrendonner (1981, pp.128-133) を参照。また、次節で例文 (21) に即しても確認することになる。
- 12 Rossari (2005, pp.94-95) は、話者交代の直後に *cela dit* は使えないとしている。しかし、(22) のような実例があるので、それは誤りである。

参考文献

- Berrendonner, A. (1981) : *Éléments de pragmatique linguistique*, Paris : Minuit.
- Berrendonner, A. (1983) : « Connecteurs pragmatiques » et anaphore », *Cahiers de linguistique française*, 5, pp.215-246.
- De Mulder, W. (2006) : « Maintenant : un connecteur token-réflexif ? », *Cahiers Chronos*, 15, pp.21-38.
- Dostie, G. (2005) : *Pragmaticalisation et marqueurs discursifs*, Bruxelles : Duculot.
- 樋口詩織 (2012) : 「*Quand même* の用法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』27, pp.63-80.
- Kleiber, G. (1995) : « D'ici à là et vice versa : pour les aborder autrement », *Le Gré des Langues*, 8, pp.8-27.
- Nyan, Th. (1992) : « Ceci dit », *Revue Romane*, 27, 2, pp.182-206.
- Rossari, C. (2002) : « Mais que sont donc les mots du discours ? », M. Carel (éd.) : *Les facettes du dire. Hommage à Oswald Ducrot*, Paris : Kimé, pp.283-296.
- Rossari, C. (2005) : « *Cela dit* : un marqueur de prise de conscience », A. Steuckardt et A. Niklas-Salminen (éds.) : *Les marqueurs de glose*, Aix-en-Provence : Publications de l'Université de Provence, pp.87-10.
- 田代雅幸 (2012) 「フランス語の *au contraire* に関する一考察」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』27 : 11-28.
- 田代雅幸 (2013) 「フランス語 *au contraire* のモノローグにおける用法について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』28 : 107-130.
- 田代雅幸 (近刊) 「フランス語の副詞句 *au contraire* の論証的な用法について」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』23.

- Thérive, A. (1929-1940) : *Querelles de langage*, 3 vols, Paris : Stock.
- 渡邊淳也 (1993) : 「連結辞 *donc* の機能について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』8, pp.15-42.
- 渡邊淳也 (1994) : 「連結辞 *alors* の機能について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』9, pp.86-123.
- 渡邊淳也 (1995) : 「連結辞と発話の階層的構成」『フランス語学研究』29, pp.25-37.
- 渡邊淳也 (1997) : 「推論マーカーと連結辞の諸問題」『フランス語学研究』31, pp.40-46.
- 渡邊淳也 (2001) : 「連結辞 *ainsi* の機能について」『玉川大学文学部論叢』41, pp.161-184.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』東京 : 早美出版社.
- Watanabe, J. (2006) : « Addition quantitative, addition qualitative et la locution *non seulement* », J. Kawaguchi et alii (éds.) : *Cognition et émotion dans le langage*, Tokyo : Université Keio (Centre de recherche interdisciplinaire sur la cognition), pp.191-205.